薬師さまと清水池の亀

やくしさま　と　しみずいけのかめ

作:近藤せいけん

かながわけんあつぎしのつまだにつまだやくしというおてらがあり、そのけいだいには、じゅれい７００ねんといわれる、きょぼく、こぼくのクスノキがあります。みきには「たけだ　しんげん」がおだわらじょうをせめ、きろ、やしろどうにはなったひが、もえうつったあとがのこっています。
そのすぐちかくに、ちいさなわきみずのいけがあります。
「やくしさまのしみずいけ」とよばれています。むかしえらい、おぼうさまがやくしどうでなのかななやのしゅぎょうをされ、まんがんのあさがた、しみずいけにはすのしらねがいっぱいのび、きれいなはながさいたとつたえられているいけです。
そこにはむかしからおおきなかめがすんでいます。いまからずうっとむかし、えどじだいのおはなしです。
あるあさ、やくしさまからほどちかいつまだむらのたんぼのこみちをいっぴきのちいさなかめがゆっくり、のそり、歩いていました。そこへのらいぬがやってきて、かめをほえ、あしでこうらをひっくりかえし、かみついていました。
そこへのらしごとからのかえりの、ひとりのおとこのこがきました。
なをじすけいます。たんぼやはたけのしごとを、びょうきのちちにかわり、ははおやとおさないきょうだいとちからをあわせ、さくもつをつくっています。
じすけはくわをもちあげ、のらいぬにたちむかいました。
「あっちへいけ！かめからはなれろ！たたくぞ！いけいけ！」
じすけはのらいぬのあしもとに、くわでおもいきり「ざっく！」とつちをけずりました。
のらいぬはおどろいて、「きゃん、きゃんきゃん」とさけびとびのきにげさっていきました。
「かめよ、よかったな～、もうだいじょうぶ。こわかっただろう、きずはないか？さてどうしようか、おまえはどこからきたのか？」
じすけはかんがえました。
「そうだ、このちかくのいけというと、やくしさまのしみずいけじゃろ。しみずいけまでつれてってやるから、あんしんしなよ」
じすけはせなかのかごにかめをそっといれました。そしてやくしさまのしみずいけをめざしてあるきはじめました。
とちゅうで、むかえにきた、おさないきょうだいにであいました。
「に一に、かごになにがはいってる？」
「これか。かめだよ。」
「かめ？どうするだぁ」
「やくしさまのかめだと、おもうだぁ。」
「しみずいけににがしてあげようとおもうだぁ。」
「そうか～じゃぁいこう」
みなで、かけこえをかけ、てをつないでしみずいけにむかいました。
いけにつきました。さっそくかごをおろし、やさしくかめをだきいけにはなしてあげました。かめはうれしそうにみずからあたまをだし、およぎまわりました。
きょうだいはかめをやさしくみつめていました。

「よくしにょらいさま、にょらいさま、どうか、おとうのめをなおしてください」
「どうか、どうか、おねげい、いたしますだ〜」
「めをみえるように、おねげい、いたします。」
おさないいきょうだいもてをあわせ「にょらいさま」にいのりました。
またてをつないで、つまだむらのいえにいそぎました。
いえでは、ははのたかが、しょうがつようのおかざりをいっしょうけんめいつくっていました。
めのみえないちちもきようにわらをあんでいました。

「おかあ、に一にがきょう、あぜみちをよちよちあるいていたかめを、のらいぬからたすけ、やくしにょらいさまのいけにもどしてあげたんだょ」
はは　「そうか。それはいいことしたねぇ〜」
ちち　「そうか。にょらいさまのごりえきがあるぞ、あはは」
はは　「それじゃ、ばんめしにするか。おとなりからいただいたおいしいにつけがあるぞ。」
じすけ　「かか、てつだうからはやくしてくれ、はらがすいた」
まずしいながら、いっかそろってのばんめしである。わらいがたえないかぞくのいちにちがおわり。とこについた。
じすけはふしぎなゆめをみた。
ゆめのなかにやくしにょらいさまがおでましになり。こうつげた。
「じすけや、きのうは、わたしのつかいのかめをたすけてくれて、ありがとう。れいをいいます」
「おれいにあなたのねがいを、ききとどけよう。」
「おとうの、めをなおしてあげます。」
「あさひがあがり、そのひかりがしみずいけにとどくとき、いけのみずをくみなさい。そのみずで、おとうのめをあらいなさい」
「さすれば、ただちめのやまいはさり、もとのしぜんのめにもどっているでしょう。
じすけははっとしてとびおきた。あたりはまだくらかった。
「これは、にょらいさまのおつげだ！」、すぐにいふくをととのえ、
きのおけをもち、まだくらいよあけまえのこみちをいそいで、やくしにょらいさまのしみずいけにむかった。
しみずいけにつくと、「やくしにょらいさま」にいのりをささげました。
「どうか、にょらいさま、おとうのめをおなおしください！」
「どうか、どうか、おねげいいたします！」
「おつげのとうり、おみずをくんでまいりますだ」
じすけはあさひのあがるのいまかいまか、とまった。しばらくして、ひがしのそらがだんだんあかるくなり、さいしょのあさひがしみずいけにとどいた。すると、いけのうえがぱぁっとあかるくなり、「やくしにょらいさま」がおでましになった。
じすけのもっていたおけがおともなくいどうし、しみずいけのおみずをくんだ。そしてまた、お

ともなくじすけのてもとにもどった。
「じすけや、かめをたすけてくれたぜんぎょう、そしてひごろのおまえのおやこうこう、よきこと、よきこと、つづけよ、」
とつげると、にょらいさまのおすがたはきえた。
じすけはやくしさまにふかぶかとあたまをさげ、やくしさまのせいすいをいれたおけをもっていえにいそいだ。
「おとう、おとう、やくしさまのおみずをいただいてきた！」
「おかぁ、おかぁ、きてくれ！」
「りゅう、ゆあ、みんなきてみろ！」
かぞくがみな、どまにあつまった。
「じすけ、どうした？なにがあったじゃ～」
「にーに、なんじゃ？」
じすけがさくやのゆめのはなしをし、しみずいけの「やくしにょらい」がおんみずから、おみずをくんで、わたしていただいたことをつげた。
かぞくぜんいんがつまだやくしにょらいにむかって、てをあわせいのった。
「おとう、めをあらえ」
みながみまもるなか、おとうは、りょうてをおけにいれ、めをゆっくりとあらい、みずのなかでりょうめをひらいてみた。
「おお、おお、みえる！おれのゆびがみえる。みえるぞ！」
「ありがたや！ありがたや！みえるぞ！うおおおぅ」
「ほんとうか！おとう、おとう！」
「おとう、おとう！このゆあがみえるか、おとう！」
「みえるぞ、みえるとも！おかぁも、じすけも、りゅうも、みんなみんな、みえる」
「やくしさま、ありがとうごぜいます！うう、うっうっ」
「よかった！よかった！やくしさま、ありがとうごぜいます！」
いっかは、つまだのやくしさまにいつまでも、いつまでも、ながいいのりをささげました。
それからのちもいつまでも、しあせにくらしました。

（おわり）